

H^{ostelling} Magazine



COVER INTERVIEW

大沢たかお

人生をもっと色鮮やかにしたいなら



この冊子は、宝くじの社会貢献広報事業として助成を受け作成されたものです。



さあ、いま、キミと!
ランチパック



小芝 風花
ランチパック



ランチパック



光は、海の底より浮上する。

沈黙の艦隊

THE SILENT SERVICE

大沢たかお
玉木宏 上戸彩
ユースケ・サンタマリア 中村倫也
中村蒼 松岡広大 前原滉
水川あさみ
岡本多緒 手塚とおる 酒向芳 笹野高史
アレクス・ポーンヴィッチ リック・アムスバリー
橋爪功 夏川結衣
江口洋介

原作:かわぐちかいじ「沈黙の艦隊」(講談社(再))
監督:吉野耕平 脚本:高井光 音楽:池頼広
主題歌:Ado「DIGNITY」(ユニバーサルミュージック) / 楽曲提供:B'z
製作:Amazon Studios 制作プロダクション:CRUDEUS 協力:防衛省海上自衛隊 配給:東宝
©かわぐちかいじ/講談社 ©2023 Amazon Content Services LLC OR ITS AFFILIATES. All Rights Reserved.

9.29
劇場公開

silent-service.jp ©TOHO

男は、日本初の原子力潜水艦に核ミサイルを搭載し、反乱逃亡した――。



日本ユースホステル協会は日本国内にユースホステルを設置・運営すると共に、国際ユースホステル連盟 (Hostelling International) や各国のユースホステル協会と協調し、知見を広める「旅」を促進する活動を行っています。

子どもはおとなに。
おとなは子どもに、
なれる場所。



02	Cover Interview 大沢たかお 人生をもっと色鮮やかにしたいなら
08	Youth Hostel Pick up 小千谷ふるさとの丘ユースホステル 築120年の古民家で 人と自然の温もりに包まれる宿
12	Hostelling Magazine × 地球の歩き方 今こそ、行きたい！ 王道のパリ フランス
16	PLAtZ
17	おしえて！旅GIRL
18	松島むうの晴れときどき旅びより
20	YH-GUIDE ユースホステルガイド 関東/北信越地方

人生をもっと色鮮やかにしたいなら



PROFILE |

俳優
大沢たかお (おおさわたかお)

東京都出身。大学在学中にモデルデビュー。1994年にドラマ『君といた夏』で俳優デビューし、その後数々のドラマや映画、舞台などに出演。近年の主な出演作は、テレビドラマ『JIN-仁-』(2009年、2011年)、NHK大河ドラマ『花燃ゆ』(2015年)や、映画『霧の盾』(2013年)、『風に立つライオン』(2015年)、『AI崩壊』(2020年)、『妖怪大戦争 ガーディアンズ』(2021年)、『キングダム』シリーズ(2019年、2022年、2023年)など。10月から放送予定のフジテレビ月9ドラマ『ONE DAY～聖夜のから騒ぎ～』で、12年ぶりにドラマの主演を務める。

ヘア&メイク:松本あきお(beautiful ambition) / スタイリスト:黒田領 / フォト:小林潤次(七彩工房)

Hostelling Magazine Cover Interview

TAKAO OSAWA

自分らしく生きられるようになったきっかけは 大学時代に経験したハワイ人旅

—9月29日に公開される映画『沈黙の艦隊』は「国家とは」という大きなテーマについて考えるきっかけになる作品だと感じました。大沢さんは「自分は日本人だなあ」と感じる時はありますか？

実を言うと、昔から「日本人らしい」という感覚を持ったことがあまりないんです。子どもの頃から周りの人と上手く付き合っていくことに難しさを感じていて…。学校の友達と過ごしていても違和感を持ちながら「こういうものなのかなあ、人生って」なんて思ってしまうような子どもでした。この違和感は中学時代も高校時代も変わらなくて。当時は海外の映画を観るのが好きだったんですけど、映画館に映画を観に行ったら「こんなにかっこいい世界があるのに、なんで俺の日常ってこんなに窮屈なの？」と思っていました。

—そんな日々の“違和感”から抜け出すターニングポイントは何だったのでしょうか。

大学に入った頃、たまたまスカウトされたことがきっかけで、ファッションモデルという職業に出会ったのが転機でした。海外にルーツを持つモデルの友人が周りに増えてから、価値観の合う仲間が増えて日常がすごく楽しくなってきました。今まで「自分は人に合わせて生きることが苦手なんだ」と思っていたけれど「もしかしたら間違っていたわけじゃないのかも」と思えるようになりました。

それで、まずは海外に住んでみようかと大学1年生のときにハワイへ20日間一人旅に行きました。その頃からかな、いきいきと自分らしく生きられるようになったのは。「こうあるべきだ」とか「周りの顔を気にしなきゃいけない」とか、そういうものとは全然違う世界が地球にはあるんだって、ハワイでの一人旅を通じて初めて知って。それから旅に魅了されてあちこちに行くようになったし「将来どんな職業に就いたとしても、世界と関係を持てるような仕事がいい」と思うようになりました。その想いは、今でもずっと変わらず持ち続けています。

パリで味わった大きな挫折 それでも、世界への想いは強まった

—大学3年生の頃にはパリコレに挑戦するためにパリに2ヵ月滞在されたそうですね。

「日本でなく海外で勝負するほうが自分に向いているんじゃないか」と思ったことがきっかけで挑戦したんですけど、もう最悪でしたよ(笑)。お金はないわ、オーディションに全然受からず具合が悪くなっちゃうわで…。

—体調崩しちゃったんですか？パリで一体何があったのでしょうか…？

当時は英語もほとんど話せず、フランス語なんてまったくわからない状態で世界のトップモデルたちが集まる中に突然入ってしまった結果、すべてにおいて格が違うことを見せつけられましたね…。今まで生きてきた二十数年間を全否定されたような気持ちになりました。

た。オーディションに行っても、まったく話にならない。半歩歩いただけで帰らされてしまうんです。そもそも、身長190cm以上のモデルばかりが集まる中に、一人180cmそこそこのモデルが混ざっている時点でアウトなんですけどね。「世界って、とてつもないところなんだな」と痛感しました。

ところが不思議なもので、こんな挫折を経験しても「日本にいるよりいい」って思えたんです。相手にされなくても、自分らしくいられたから。パリのカフェでお茶を飲むだけでも本当に楽しかったし、お金がなかったから毎日パンをかじるぐらいの食事しかできなかったけれど「俺が求めていたのはこれだ！」っていう感覚が同時にあって。「旅でも住むでもいいから、とにかくこれからも世界の土地や人と関わり続けていきたい」と強く思うようになりましたね。

—「ここで頑張るしかない」と思うと鬱々としてしまいますけど、旅に出ているいろんな文化や価値観に触れると「こんな考え方や生き方もあるんだな」と心が軽くなりますよね。

そう思います。僕は東京出身ですが、こんなに人間が接近して、お互いの顔を気にして、どんぐりの背比べをする中で、飛び抜けたら叩かれるし、引っ込んだらバカにされる。そんな世界で人間らしく生きるって、実は難しいと思うんですよ。僕は10代のとき、海外に行くことで「日本で嫌われてもいいや。ダメでも、何を言われてもいいや」と思えるようになりました。

9.11テロ事件当日、 路頭に迷いかけていたマンハッタンで

—大沢さんといえば、1996年から放送されたドキュメンタリードラマ『深夜特急』で、原作者の沢木耕太郎さん役として主演を演じられ、実際にユーラシア大陸縦断の旅を追体験されていますよね。あのドラマがきっかけで旅にハマったという人もたくさんいました。

面白かったですよ！あのドラマは、ドラマとドキュメンタリーを行ったり来たりする不思議なドラマを目指していたんです。駅で野宿するシーンがいくつかあるんですけど、僕はあのとき実際に野宿をしていたんですよ、一人で。他のスタッフたちは機材の充電をする必要があるので全員ホテルに帰るんですが、僕はどうしても野宿のシーンを自然に表現したくて、駅で寝ていました。スタッフには「朝、撮影が始まる時に足を叩いてくれ」と伝えて、現地の人と一緒に野宿をするんです。朝スタッフから合図を受け取ったら、僕は寝ているところから芝居を始めるという。

—すごい…まさか本当に野宿しているとは思っていませんでした！

一人旅のドキュメンタリードラマだから、そのほうが絶対いいでしょう？スタッフのみんなとは仲が良かったけれど、食事もなるべく一人で取るようにしたり。そうそう、ネパールに滞在しているとき、僕は一人で夕食を食べに行き、他のスタッフは全員日本料理店に行ったんです。で、翌日、集合場所に行っても僕しかなくて「なんで誰も来ないの？」って戸惑っていたら、スタッフ全員お腹を壊してしまっていて…。海外ロケの修羅場をくぐってきたスタッフたちでしたけど、久しぶりの日本食に気が抜けてしまったんでしょうね。現地の生水でつくられた氷を飲んでしまったようで。結局、その日

の午前中の撮影は中止になってしまいました(笑)。

—パキスタンの警察に捕まるシーンもリアリティがありましたね。野次馬がカメラに「撮るな」と言っているようなシーンもあって(笑)。

ガチなんですよ、本当に。あのとき、実はパキスタンは選挙期間中で、ものすごく危険な時期に撮影をしていたので、他のシーンを撮影しているときも、ものすごく揉めていました。

—本当にチャレンジングな作品ですね。大沢さんがドラマで行かれたときの香港と、今の香港もまったく違いますよね。

僕が行ったときは、まだ九龍城がありましたからね。当時の香港は怖かったなあ「さらわれるんじゃないか」って思うような空気感で…。

実は一度助けられているんですよ、ユースホテルに。僕、2001年9月11日に起きたアメリカ同時多発テロ事件のとき、ニューヨークにいたんです。帰国するために空港へ向かっているときに、ワールドトレードセンターに飛行機がぶつかって。空港にチェックインして搭乗しようと待っていたら、急に軍隊が入ってきて追い出されてしまい、空港の外のあまり治安が良くなさそうなエリアで待機していたんです。深夜になってようやく電車が利用できるようになったのでとりあえず駅に行ってマンハッタンには入ったけれど、街は大変なことになっていて。どうしようかなと思って駅員さんに尋ねたら、「マンハッタンのユースホテルなら助けてくれるかも」と教えてくれたんです。それで電話をかけたら、たまたま一部屋だけ空いていて、無事に泊まることができましたんですよ。本当にすごく助かりました。

TAKAO OSAWA



そういえば、初めてパリコレに行ったとき、香港経由で行ったんですけど、泊まる場所がわからなくて街中をトランクを引っ張りながら歩いていたら、おばさんに声をかけられて、「ここ安いから泊まっていきな」って片言の英語で言われて、そのとき泊まったのが「重慶大廈(チョンキンマンション)」というゲストハウスで。実は、そこが小説『深夜特急』のスタート地点なんです。ドラマの主演が決まって原作を読んだときに、「おお、ここに沢木さんも行ったんだ！」って驚きました。

—そんな運命的な出会いがあったんですね！ちなみに…大沢さんはこれまでにユースホテルを利用された経験はありますか？

新しいことにチャレンジし続けなければ 世界は認めてくれない

—海外での経験が、俳優のお仕事に活かされたと感じることはあるのでしょうか？

旅に出たり、海外で仕事をする中で、その国々の価値観が自分の中に入ってきますよね。そうすると、良い/悪いの基準が変わるので、どんなに他の日本人が「イエス」と言っても自分は「ノー」って言えるようになるんです。それが絶対に良いことかどうかはわからないけど、少なくとも俳優という仕事をやっていく上では助けになりました。

新しいことをやらないと、世界は認めてくれない。日本人は同じことを繰り返すのが好きだから、同じ俳優さんが同じ表情をして同じことをやるのを求められがちなんです。でもそれって海外ではナンセンスで。例えば、僕が子どもの頃から映画で観ていたハリウッド俳優のロバート・デ・ニーロは、作品ごとに違う役を演じているし、他の俳優もいろんなことをやっています。だから、僕が俳優として仕事を選ぶときは、「新しいことができるかどうか」というところに大きなウエートを置いているんです。

—今回主演を務められた映画『沈黙の艦隊』も、新しいこと=タブーに切り込んだテーマの作品といえますよね。

それくらいやらないと、世界には太刀打ちできないと思っています。今、世界の映像作品はタブーも何もあったもんじゃない。「見せていいの？」みたいなとんでもないドキュメンタリーを作ったりしている。でも、そうやって「時に失敗しながらもどんどん進化していく」というのがエンターテインメントの世界だと思っています。僕はそういう世界に携わるのが好きなんです。この国は保守的で安全で、もちろん良いところもあるだろうけど、我々のやっているエンターテインメントはそれではいけなくて。もっと海外の人みたいにワイルドじゃなきゃいけないし、失敗を恐れずどんどん新しいことに挑戦しなきゃいけないというのがベースにあると思います。いろんな動画サービスがある中で、さまざまなタブーをみんな飛び越えて、人の心を驚かすような作品が世界中で生まれています。そんな中、タブーを避けて綺麗事で作った作品を世の中の人にはきっと見たくないですよ。

毎日リュックを背負って大学に通った アメリカでの留學生活

—2016年には2年間俳優業を休業して海外留學をされたそうですね。とてもチャレンジングな経験だったのかなと思うのですが、そのときのエピソードについてお聞かせください！

なんだか息苦しくなってしまうと、一度日本のお仕事を休業しているいろんな場所に行きました。主に滞在したのはロサンゼルスでした。英語を学び直したくて、知人の紹介で大学に留學させてもらうことになったんです。そのときはすごく楽しかったですね！普通にリュックを背負って毎日大学に通っていました(笑)。

日本だと英語の教材があって「今日はこのページの政治の話をやしましょう」みたいな形で授業が進むと思うんですけど、アメリカではそういうのが一切なくて、ほとんどフリートークなんです。例えば「今日は愛について話そう」みたいな。で、まず先生が自分の恋愛の話をするんです。「私のボーイフレンドはこういう人でねー」って。そうすると、自分も不思議と喋りたくてしょうがなくなるんですね(笑)。「喋れなくて悔しい！」という気持ちになれる授業だから、すごく成長させてもらいました。

—今回『沈黙の艦隊』で演じられた海江田四郎も、劇中英語を話すシーンが多かったですよね。海江田の話す英語は「軍人」という感じがしたのですが、どんなことを意識して役作りをしましたか？

原作や台本を読んだときに、海江田は「日本で英語をものすごく勉強した人だろうな」って思ったんです。それで「日本で独学で勉強した、正しい英語を喋る人」を意識して役作りをしました。以前、三島由紀夫さんが英語で討論する映像を見たときに「あ、これはいつか利用できたら良いな」と思ったことがあって、今回の撮影が始まるタイミングで見返したんです。彼の知性って、発音の良さでも何でもなく、使う単語の「語彙力」に現れていると思うんです。難しい単語を台本もなく普通に使うって、とてつもなく難しいことなんですよ。外国人の知り合いに映像を見せても「この人はすごい！」って驚いていました。彼の真似をするわけではないけれど、彼のような英語の使い方がいかなって参考にさせてもらいました。



「絶望」から始まる事件 議論のきっかけとして楽しんでほしい

—Hostelling Magazineの読者には大学生が多いのですが、どんな気持ちで『沈黙の艦隊』を観てほしいかお聞かせください。

実は、この映画の原作漫画は30年前の作品なのですが、多分30年前より今学生の読者の皆さんのほうが自分事化しやすい内容だとと思うんです。今、世の中全体が厳しい局面に差し掛かっていますよね。世界の国際問題という意味でも、日本の安全保証という意味でも。原作が連載されていた当時は、アメリカとソ連の冷戦中という時代だったけれど、今はロシアとウクライナの戦争が続いているし、それ以外の国でもいろんなことが起きています。今の学生の子たちは、これからもこういった社会情勢と向き合い続けなきゃいけないし、判断していかなくちゃいけない。「脅威に対してどう向き合うのか」とか「他の国が核を持って攻めてきたらどうするのか」みたいな、30年前はファンタジーだったことが今は決してそうではなくて。

僕が演じた海江田という男は、世界中を巻き込む大事件を起こすというテロリストみたいな人物ですが、彼が行動を起こした動機って、おそらく「この世界に対する絶望」から始まっていると思うんですよ。その絶望感って、もしかしたら僕らの世代よりも今の若い子たちのほうが理解できるんじゃないかなと思っていて。だから僕は、むしろ若い子たちにこの映画を観てほしいなと思っています。今まではみんなで平和を守ってきたんだけど、特に核を巡る話は日本ではタブー視されているというか、議論しなきゃいけないみたいな空気があるじゃないですか。それはもちろん、日本は唯一の被爆国だったこともあるけれど、だったらなおさら議論すべきだと思います。そろそろ向き合っていくないと、何か起こったときに、ただパニックを起こすだけになってしまうから。若い世代は頭が柔らかいからこそ、世の中の問題に対して少し免疫をつけておく必要があるんじゃないかなって。

—戦争を起こさないために、世界と日本が置かれている状況について議論をするということですよ。

ようやくコロナが落ち着いて、映画館でみんなで一緒に映画を観ることができるようになったタイミングでの公開となります。改めて、本作の見どころや楽しみ方をお聞かせください。

核や戦争を取り巻く問題って、今まで日本はエンターテインメントで触れちゃいけない国だったんですよ。「核」って言わないようにしましょうね」と、何となくポカしながらずっとやってきたんですよ。でも、そろそろ曖昧にしないでいいんじゃないかなって思うんです。『沈黙の艦隊』は、押し付けがましいメッセージを打ち出すのではなく、核や戦争に関する問題をひとつの「エンターテインメント」として形にした作品です。暴挙に対処する日本とアメリカの政治であったり、周りの仲間の想いだったり、それぞれ立場が異なる人を見てどう思うのか。メディアはどういうふうに事件を扱うのか。こういったことを一緒に見て、楽しんでもらえたらいいなと思いながら作品に関わってきました。

僕は別に答えは言いません。主人公が起こした事件についてどう思うかは、映画を観た人次第。主人公に対して「それは違うよ」「そんなのただのテロリストだよ」って思ってもいいし「一理あるよね」って思うのも自由。一人の男が起こした暴挙の顛末を見て、自分なりにジャッジしてほしいな。

世界はたくさん色と 無限大の個性であふれている

—最後に、旅好きの大沢さんから、これから旅に行こうとしているHostelling Magazineの読者へ、メッセージをいただけたら嬉しいです！

旅に興味を持ってもらって、難しいですよ。というのも、旅って僕らの世代でも興味ない人にとっては興味のないことだし、海外に行くと「もう二度と行きたくない！」って思う人もきっといるじゃないですか。

ただ、個人的に思うのは、自分の人生を色鮮やかにしたいなら、絶対海外に行ったほうがいいと思います。なぜなら、海外って色であふれているし、無限大のキャラクターが存在する世界なんです。日本人は、これだけ自由になって、インターネットでいるんな情報が手に入る世の中だとしても、まだまだ単色な人が多い。単色に囲まれた場所にいる心地が良ければいいけれど「もっと鮮やかに生きたい！もっといろんな色を出したい！！」って思うのなら、その色に実際に触れてみないと自分自身の色も出てこないと思います。

—一度色鮮やかな世界を見ると、きっとモノクロに見えていた日本の見方も変わってきたりしますよね。

まるっきり変わりますよ。「空ってこんなに青いのか！」とか「人ってこんなに笑顔なんだ！」って。僕、29歳のときにロサンゼルスでアパートを借りて住んでみたことがあるんです。そのときジムに通うことにして「じゃあ有酸素運動から始めようかなー」って準備をしている時に、隣にいた女の子がヘッドホンをせずに大声を出して踊りながらトレーニングをしていて「やばいな、アメリカ！何でもありなんだな、この人たちは」って(笑)。でもね、「周りにどう見られるか」なんて気にせず自分らしく生きている彼女の姿にすっごく救われたんです。色鮮やかで無限大の個性に触れて、その中から「こういう人のこういうところがよかったな」とか、「あのときの彼のこういう姿がよかったな」というのを真似するうちに、すっごく面白い自分になれるんじゃないかなと思います。

大沢たかおさん主演

沈黙の艦隊

THE SILENT SERVICE

2023年9月29日(金)全国劇場公開!



抽選で 映画『沈黙の艦隊』オリジナルステンレスボトル2名様にプレゼント!

応募は日本ユースホステル協会ホームページの専用お申し込みフォームから!

<http://www.jyh.or.jp/hmq>

応募〆切:2023年12月末日

※当選者にはご応募時にご登録いただいたメールアドレス宛にご連絡いたします。
@jyh.or.jpからのメールが受信できるように設定をお願いいたします。



日本ユースホステル協会は日本国内にユースホステルを設置・運営すると共に、国際ユースホステル連盟(Hostelling International)や各国のユースホステル協会と協調し、知見を広める「旅」を促進する活動を行っています。

こどもはおとなに。
おとなはこどもに、
なれる場所。



Hostelling Magazine vol.34



Cover Interview
大沢たかお
人生をもっと
色鮮やかにしたいなら

P.02



Youth Hostel Pick up
小千谷ふるさと
ユースホステル
築120年の古民家で
人と自然の温もりに包まれる宿

P.08



Hostelling Magazine
× 地球の歩き方
今こそ、行きたい！
王道のパリ
フランス

P.12



PLAtZ

P.16



おしえて! 旅GIRL

P.17



松島むうの
晴れときどき旅びより

P.18



YH-GUIDE
ユースホステルガイド
関東/北信越地方

P.20



Hostelling Magazine vol.34
まとめてダウンロード

※本誌の情報は2023年9月20日現在のものです。変更になる場合がありますので、お出かけの前に現地にお確かめください。

発行所 一般財団法人日本ユースホステル協会 編集・発行人 寺島 真

TEL.(03)5738-0546 〒151-0052 東京都渋谷区代々木神園町3-1国立オリンピック記念青少年総合センター内

※本誌掲載記事の無断転載を禁じます。